

二十五菩薩來迎の思想について

藤井智海

平安朝中期以後に於ける信仰の世界を魅力的ならしめたものは、極樂往生願求の信仰である。その信仰の展開に於て、主導的地位を占めるものは、阿彌陀如來引接への熱望であつたが、時代が降つてくると、二十五菩薩來迎の思想も展開されて來たのである。

さて、首題の二十五菩薩來迎の思想といふのは一般に觀音、勢至をはじめ、二十五人の菩薩達が願生西方の行者を臨終に來迎すると云う意で、今茲に云う二十五菩薩名は觀世音、大勢至、藥王、藥上、普賢、法自在、獅子吼、陀羅尼、虛空藏、德藏、寶藏、金藏、金剛、山海慧、光明王、華嚴王、衆寶王、月光王、日照王、三昧王、自在王、大自在王、白象王、大威德王、无邊身の二十五人の菩薩を指すのである。

然らば二十五菩薩の「二十五」と數を限つた理由については、吾人の推論によれば、恐らく二十五有又は二十五三昧と

云う言葉から採つたものかと思われる。

二十五三昧のことは源信僧都の著に二十五三昧講式一卷がある。これは源信四十五歳、即ち、寛和二年五月二十三日に禪滿、祥道などの二十五人の方が二十五三昧を行つたものである。従つて、此等の名に因んで、源信四十七歳の時に、「横川首楞嚴院二十五三昧起請」とか、「二十五三昧根本結縁過去帳」と云つて、源信の著がある。

この二十五三昧の典據は「大般涅槃經」卷十三に、善男子菩薩摩訶薩住無畏地得二十五三昧壞 二十五有善男子得無垢三昧能壞地獄有得無退三昧能壞畜生有……得我三昧能斷非想非々想處有善男子是名菩薩得二十五三昧斷二十五有善男子如是二十五三昧名諸三昧王
（大藏十二ノ六九〇頁）

とある。また「法華玄義」卷六上に

諸三昧相對者諸機乃多不出二十五有諸應乃多不出二十五三昧地獄有善惡之機關無垢三昧慈悲之應
（佛教大系四ノ四七頁）

とあつて、初めて二十五の數が所出されているが、この三昧

の目的は即ち二十五三昧を修して三界二十五有に沈倫せる衆生を救済する菩薩を指すものならんと考へられる。

さて、然らば二十五菩薩と云う名前の使用されるようになるのは何時頃かと云へば、「十往生阿彌陀佛國經」に

佛告山海慧菩薩汝今欲度一切衆生應當持是經……若有如是等人我今日當使二十五菩薩護持是人常令人無病無惱若人若非人不得其便行住坐臥無間晝夜常得安穩若有衆生深信是經念阿彌陀佛願往生者往生者彼極樂世界阿彌陀佛即遣觀世音菩薩……無邊身菩薩是二十五菩薩擁護行者若行若住若坐若臥若晝若夜一切處不令惡鬼惡神得其便也

(巴續八十七套二十二ノ二九三丁)

とあるに依るが、然し乍ら本經は釋迦、彌陀が二十五菩薩をして願生西方の行者を不斷に擁護せしむると云うのみで、決して臨終來迎の聖衆をして二十五菩薩を局つて説いているのではなく、一々の菩薩の儀相についても少しも述べていない。喩へば、善導の往生禮讚には

十往生經云若有衆生念阿彌陀佛願往生者彼佛即遣二十五菩薩擁護行者若行若坐若住若臥若晝若夜一切處不令惡鬼惡神得其便也

(昭和眞宗校訂七祖聖教四六五頁)

とか、或は觀念法門には

又如十往生經說佛告山海惠菩薩及以阿難若有人專念西方阿彌陀佛願往生者我從今已去常使二十五菩薩影護行者不令惡鬼惡神惱亂行者日夜常得安穩

(右同三九九頁)

二十五菩薩來迎の思想について(藤井)

などの引用にても、何れも二十五菩薩は平生に願生行者を守護すると云うのみで、決して臨終に來迎すると云うのではない。惠心僧都も亦、要集の念佛利益門彌陀別益の章、或は極樂證據門の第二兜率の章にも、二十五菩薩のことが記されているが、それは「十往生經」を引用して、同經の所説の如くに記してある。或は親鸞聖人の「御本書」行卷にも

問曰稱念禮觀阿彌陀佛現世有何功德利益 答曰……十往生經云若有衆生念阿彌陀佛願往生者彼佛即遣二十五菩薩擁護行者……復與前二十五菩薩等百重千重圍繞行者

(六要會二、四十一右)

とあつて、二十五菩薩の名前を見出すのである。然し乍ら此等の菩薩は何れも臨終來迎の聖衆としてではなく、單に行人の平生に於ける守護の菩薩として取扱われている。よつて阿彌陀佛を中心とする思想を二十五菩薩來迎と呼ぶことは不當であると思う。

二

然らば二十五菩薩が聖衆の來迎に關係のないことは「往生傳」によつて立證される。即ち、拾遺往生傳の淨尊法師の條に、

清淨香潔共入持佛堂通夜勤行千時曉也有數千人從空而下光明遍照音樂普聞指西而去極服而消矣後見堂內僧尼二人曲躬合掌向西而滅矣

(佛全一〇七ノ五三頁)

とあり、又「榮華物語」の音楽の卷には

阿彌陀佛念じ奉る人をは二十五の菩薩も守り給うなりと唐の大師の宣へり
（文學大系十一ノ四〇〇頁）

又同じく「玉の臺」の卷には

これは聖衆來迎かと思ゆ、阿彌陀如來雲に乗りて光を放ちて行者のもとに坐す。觀音勢至蓮臺を捧げて共に來り給う。諸の菩薩聖衆俱樂して喜び迎え給う
（文學大系十一ノ四〇四頁）

其他、珍海の「菩提心集」上卷にも

大師釋迦牟尼佛かたじけなく二十五の菩薩をつかはして念佛の人を護り給うなりと申しおもへ
（淨全本十五ノ五一頁）

などとあつて、「十往生經」の説示しているものと同一である。

以上の文意によつて、大體二十五菩薩來迎の思想の一端が窺われるが、平安時代には來迎の聖衆は彌陀觀音以下無量の聖衆であつて、それは平生に念佛行者を守護すると云う二十五菩薩とは明かに區別せられておつたと思われる。然るに時代が降つて南北朝時代に至ると、兩者が混用せられるようになった。「増鏡」第五大内やまの條に

法水院、化水院、無量光院とかやとて、來迎のけしき彌陀如來二十五の菩薩虚空に現じ給へる御姿も侍るあり

（日本文學大系十一ノ三五六頁）

とあるを徴すれば、明らかに二十五菩薩を來迎の聖衆として

兩者を混用して扱つてゐる。

この文は法水院などの莊嚴について述べたもので、恐らく二十五菩薩來迎圖像のことを暗示したものの如く思われる。

従つて此の記事より從來の學者は室町以降に二十五菩薩來迎の思想が起つたものと論じているが、然しもつと時代を溯つて少くとも鎌倉乃至平安末期、否、惠心在世頃までに既にその萌芽があつたものと見るのである。

その論證づけとして既に後鳥羽法皇の宸翰と傳へる無常講式と云うものがある。

仰願觀音勢至二十五菩薩普賢文殊四十一地賢聖臨命終夕捧蓮臺來草庵一期生之後導淨土移玉臺云々 その奥書に

無常識 隱岐法皇御筆

正月九日 帝王崩御同月同日

建長元年七月十三日

於雲林院書寫了

と記載されてある點より想察しても、明らかに建長以前、鎌倉初期まで溯源することが出来る。

三

さて然らば、茲に來迎の義相に就いての問題であるが、これに二種の見方がある。元來、來迎の義は十九願の所誓であり、諸行往生の要門の行者にとつての事である。然し乍ら眞

實報土の往生を期する弘願の機について不必要でないかと云うに、凡そこれに須來と不須來との二種がある。前者の須來の來迎とは要門の行者が臨終の來迎を待つて往生の得否を定めるのであるから、來迎は往生のための必須の條件となつてゐる。然るに後者の不須來の來迎とは弘願の行者が信一念の當體に攝取不捨の益にあづかるので、臨終來迎を待つことなく、所謂ゆる不來迎の談、平生業成の義である。

今「往生要集」に於ける十樂中の聖業來迎樂を窺うに、聖業來迎樂者凡惡業人命盡時風火先去故動熱多苦善行人命盡時地水先去故緩變無苦何況念佛功積運心年深之者臨命終時大喜自生所以然者彌陀如來以本願故與諸菩薩百千比丘衆放大光明皎然在目前

(七祖聖教下三十一丁左)

とあつて、臨終來迎を述べる條に、「本願ヲ以テノ故ニ」と示すは、即ち別發一願の第十八願を指し、來迎を以つて弘願行者の信徳として取意されるのである。そして、その後に龍樹の易行品を引いて、

若人命終時得生彼國者即具無量德是故我歸命(右同三十二丁右)と、往生即成佛の義を現わすによれば、十九願の諸行往生の者が化土に生ずる時の來迎であり得ないことは自明の理である。よつて要集中にあらわれた二十五菩薩なるものも行人の平生に於ける守護の菩薩として取扱つて至當である。

なお前述した二十五菩薩名は十往生經を嚆矢のように説示

二十五菩薩來迎の思想について(藤 井)

したが、この經も實は偽經であると稱されて、智昇法師の開元釋教錄卷十八には偽妄亂眞錄中に所收されて他の經典には見えていない。然し乍ら淨土教では十往生經の説を正しい佛説として取扱つてゐる。

四

二十五菩薩來迎思想に關聯し惠心作と擬せられる二十五菩薩和讃は餘りにも有名であるが、これは來迎和讃の一部を廣讀し、二十五菩薩を讚詠し、その臨終來迎の相を述べたものにて恐らく來迎圖を見て任意に創作したものであろう。惠心作と信用し得る極樂六時讚、天臺大師和讃などと、本讚を比較するならば文學的價値に雲泥の差があり、同一人の作でない事は一見して明瞭である。恐らく二十五菩薩和讃は俗信仰の發展を物語るものであると云へよう。

かく論述し來るとき、來迎の思想は愈々俗信仰として發展し、茲に具體化された、所謂ゆる迎講なるものの成立を見るに至つたのである。

迎講に就いては古事談第三に

迎講者惠心僧都始給事也 三寸ノ小佛ヲ脇足ノ上ニ立テ脇足ノ足

ニ緒付テ引寄々々シテ啼泣シ給ケリ云々

(新訂國史大系卷十八ノ六〇頁)

と見え、古くは惠心を去る事違からざる本朝法華驗記卷下に

構彌陀迎接之相顯極樂莊嚴之儀世云集其場者緇素老少至放蕩邪見之輩皆流不覺之淚結往生之業迎講（續群從八輯百七十一頁）

と記し、其他塵添瑩囊鈔卷二十、今昔物語卷十五、恵心行實等にも所載されている。この事は圓智の「圓光大師行狀畫圖翼讚」にも、

迎講ハ今時當麻ノ練供養ト云フ 即チ此講ノ儀式ナリ 恵心僧都横川ノ花臺院ニヲ始行シ給シテ寬印供奉其跡ヲ戀ヒテ丹後國天橋立ニ移行ハル……具ニハ沙石集、瑩囊抄及述懷鈔ナドニ見エタリと詳説されている。榮華物語「疑」の巻にも、

六波羅蜜寺雲林院の菩提講などの折ふし迎講などにも思し急がせ給ふ（文學大系十一ノ三五六頁）

とある記事などより推察して、此の儀式は大體恵心の創案に成り、當時盛に流行していたことを想到することが出来る。今その儀相に關しては具體的な古文獻を見出し得ないので到底これ以上内容を知ることが不可能であるが、然し後世の資料より見るときは、それが二十五菩薩迎接の儀式であつた事が窺われ、恵心發案の當初は聖衆來迎の儀式であつたものが、上述の二十五菩薩來迎思想の拾頭と共に、迎講にも此の風が取入れられたものと思われる。例へば「拾遺往生傳」卷下の前權律師永觀の條にも、

於中山吉田寺修迎接之講其菩薩裝束二十具

（佛全本一〇七冊ノ八七頁）

とあるを徴しても窺知されるのである。現今練供養と俗稱して當麻寺（大和）誕生寺（美作）藤之寺（兵庫）等で行われている講會及び俊乘坊重源建立の淨土寺（播磨）に於て六十年毎に修すると云う來迎會の二十五菩薩行道等の模様と彼此思ひ合せて考うる時、この行事に二十五菩薩和讚が相當眞摯な役割を演じたとも考へられる。又その儀式に用いるため必要な二十五菩薩面なるものを源信が彫刻したと云うことが東大寺雜集錄別冊の「二十五菩薩迎講法會濫觴」と云うものの中に所出されていることも面白い一事である。又恵心の迎講を聯想させるものに二十五三昧起請と云うのがある。即ち、

「可以毎月十五日夜修不斷念佛事」の條にも、
三五夜亦念無量壽之夜也。其日此夜念佛讀經。可謂往生極樂之業……然後大衆五體投地禮拜彌陀如來。又可致命終決定往生極樂之禮拜。（惠全本一ノ三三九頁）

と記載されているが、これは恵心の念佛講（菩提講）が同志二十五人と結縁して淨土往生を欣求したと云う點より推考しても、確に恵心の頃に二十五菩薩來迎の思想が既に萌芽していたのでないかと思われる。

以上、來迎信仰の發展過程を論じ來ると同時に、來迎の儀式にかたどつた迎講が如何に尊くいみじきものであつたが窺知し得たのである。

五

かく來迎信仰の具體的表現として生れた迎講と同様に、矢張り之を藝術的に具象化しようとする企圖が行われるのは必然的な現象である。茲に淨土教藝術なる一面面として來迎藝術、即ち、二十五菩薩來迎圖などが世出されるに至つた。この來迎圖は高野山にも奈良の興福寺にも、所藏されているが、これは阿彌陀如來が觀音、勢至などの二十五菩薩を率いて念佛の行者を來迎引接し給うところを描出したものや、又二十五菩薩和讃等を思い浮べ各々二十五人の菩薩がそれぞれの持物、即ち觀音の蓮臺、勢至は合掌、藥王は幢旛、藥上は玉旛……最後の無邊身は香を持つていられることは時代性の上から見て、しかも恵心の創案になつたと云う點から見ても、實に興味津々たるを覺ゆるのである。

因みに二十五菩薩和讃は上述では恵心の偽作なりと稱したるも、小野玄妙氏の佛教美術講話には「彌陀如來に隨侍せる聖者の數は觀世音大勢至の二大聖を始めとして二十餘聖あり、其の數は二十五の數より多いけれども、普通此の種の來迎圖を二十五菩薩來迎圖としている」と、はつきりと恵心作なりと肯定していられる。

以上、大體論述したことを要約すると、
一、二十五菩薩來迎の思想は室町時代におこつたものでな

二十五菩薩來迎の思想について（藤井）

く、既に源信僧都の當時に於て目芽えていた。従つて二十五菩薩は來迎の聖衆と云つても敢て過言ではあるまい。

二、二十五菩薩即來迎の聖衆とせば、云うまでもなく、法水院等の莊嚴をば來迎の圖像に思い浮べ、來迎の圖像をば二十五菩薩來迎圖と云つても差支へない。

三、二十五菩薩來迎圖が恵心の眞作なりとせば、それを説明し且つ讚詠する「二十五菩薩和讃」等の存することも亦、當然の理と考へられるのである。

なお因みに迎講の發展過程を圖示しておこう。

